

自由と秘密を抱きしめり

—魅惑のミュージアム—

「広場としてのミュージアム」と
「墓場としてのミュージアム」。
このふたつのイメージを手がかりに、
世田谷美術館の活動を見つめ、
魅惑のミュージアムとは何かを
探っていきたい。

塚田 美紀 (つかだみき)
世田谷美術館学芸員

家出先はミュージアム

「あたしの家出は、ただあるところから逃げだすのではなく、あるところへ逃げこむのにするわ」一一歳の少女クローディアが決めた。『逃げこみ先』は、なんとニユーヨークのメトロポリタン美術館だった…。

米国の児童文学学者、E・L・カニグズバーグの名作『クローディアの秘密』(岩波少年文庫、新版二〇〇〇年、原著一九六七年)。いつでも良い子でいるのにうんざりしたクローディアが、機転



作品を見る世田谷美術館のボランティアと子どもたち。「どうなってるのかな?」

の利く弟ジェイミーを連れ、大人たちが「クローディアのねうちをもう少し認める」ようになるまで、美術館でこそり寝泊まりし続ける話だ。なんとも心惹かれる設定で、大人になりかけの子どもにとつて、柔らかくやれる心を失わない大人にとって、ミュージアムはどういう場であるか、その可能性をさりげなく教えてくれる。美術館で日々試行錯誤しながら子どもや大人の教育プログラムをつくるわたしには、大切な一冊だ。

『クローディアの秘密』の舞台となるメトロポリタン美術館は、いわすどしれた有名ミュージアムのひとつである。

「美術館はこんでいました。ふつうの水曜日で参観者は二万六千人を超します。それだけ人が八万平方メートルほどの床面積にちらばって、この部屋からあの部屋、あの部屋からこの部屋、とうろつきまわるのです。」目も眩む集客数と広さ。が、さしあたり大事なのはこのお話をなかでの美術館はニユーヨークという大きな街の象徴で、クローディアが家出先に選んだ理由のひとつもそこにある、といふことだ。「優美で、重要で、そのうえ忙しい」ニユーヨークが大好きなクローディアは、そんな街の活気をミュージアムにも感じながら、人と

モノのあいだを氣ままにうぶつくつである。さて、昼間にきわいとはうつてかわって、閉館後の夜の美術館は静寂そのもの。警備員をうまくかわしたクローディアたちは、一六世紀の豪奢な(でも力びくさい)ベッドにもぐりこむ。『クローディアは美術館の巨大なしきさのなかで、しづかなる弟のぬくもりにくついて横になりながら、やわらかい静寂がふたりのまわりをとりまくまにしておきました。しづけさのおふとんです。沈黙が頭から足のさきまでしみこんで、ふたりの心までひたしました。』展示品のベッドの寝心地を味わうことが目当てなのではない。誰にも知られず、こんなにも静かな時と場に身を置くこと、「しづけさのおふとん」を手に入れること。街を闊歩するような自由とともに、何かを求めて家出したクローディアには、静寂と沈黙だけが与えてくれる、安らぎが必要だつた。夜のミュージアムでかみしめる、こんな静かな安堵感は、よそでは得られないものだったに違いない。

ふたつのイメージをあわせもつ

『クローディアの秘密』に描かれた、ミュージアムの「昼」と「夜」—自由気ままに過ごせる街、他方では深い安息の寝床。これらの魅惑的なイメージについて、もっと考えてみるのは面白そうだ。

手がかりは、すでに今年の「月刊みんぱく」に登場している。まず、四月号の「広場としてのミュージアム」。川口幸也氏は、実際には関連のないmusee(仮語で「ミュージアム」とmuse(仮

語の古語で「無為に時間を過ごす」)はどこかで響き合っているのでは、という想像力をエンジンに、「広場」—集まり、語らい、飲み食いする、そこにいるだけの人びとを受け入れる場—としてのミュージアムを描き出す。「無為」をも含む自由な過ごし方を許容する「居場所」としての機能に、目が注がれている。他方、宮下規久朗氏は六月号「墓場としてのミュージアム」で、近年多くのミュージアムがテバートのごとき活況(?)を目指していることに疑問を投げかけ、都市型のミュージアムはそれでやむをえないにしても、莊厳なモノの靈場、「墓場」としてのミュージアムに今いちど目を向けるのも大切では、と問う。ここには、昨今のミュージアムの安易な親しみやすさ「志向」によって失われるものへの視線がある。

川口氏の言う「広場(あるいは居場所)」と、宮下氏が見る「墓場」。ふたつは対立するものではない。どちらも、ミュージアムと人との関係においてもつとも大切で、テリケートな何かを、鮮やかに浮かび上がらせてくれる。

ここ十数年のあいだに、来館者の視点からミュージアムのあり方を考えること—ミュージアム・エフェクションは、日本でもずいぶん注目されるようになった。何か「敷居が高い」と言われる美術館でも、作品に対する感想を自由に書き残せるコーナーを設けたり、ボランティアと話をしながら展示室を回れるようにするといった試みが増えている。これらの試みのなかには、地道に続けばいつか「広場」へつながりきそうなものもある。

わたしが勤める世田谷美術館には、区内の小

アフリカン・プリント

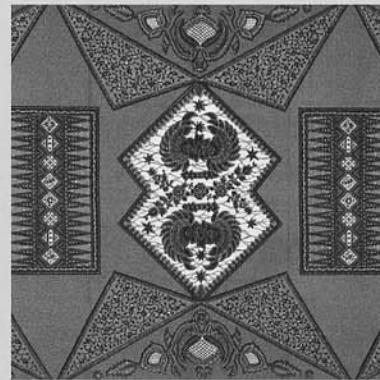
衣服製作用 染布(標本番号H223531、長さ/540cm 幅/120cm)製作年代 現代

吉本 忍 (よしもと しのぶ)

本館民族文化研究部

近現代のアフリカでもつとも一般的なフリッジヨン素材として普及している木綿のプリント更紗(プリント布)は世界的にアフリカン・プリントの名で知られている。それらの布のルーツはインドネシアのロウケツ染めの布、ジャワ更紗である。アフリカの人たちのあいだで、アフリカン・プリントがファッショントとして取り込まれるようになったのは一九世紀後半のこと。当時のアフリカン・プリントは、イギリスやオランダをはじめとするヨーロッパの国々で生産されていた。それらの多くは、ジャワ更紗のデザインを模倣したもので、同じく東南アジアに輸出されていた。

ジャワ更紗を模倣したアフリカ向けアフリカン・プリントの生産は、ヨーロッパに続いてタイ、インドネシアからの輸入品も大量に出



インドや日本でもおこなわれてきた。今日、アフリカン・プリントは、アフリカの国々でも

まわっている。

現代のアフリカン・プリントには、携帯電話をはじめとするさまざまな生活必需品をデザイン・ソースとして取り込んだ、アフリカン・プリントならではの独自のデザインが数多く見出される。しかし、その一方では伝統的なジャワ更紗を模倣したデザインも、今なおアフリカン・プリントの主要なデザインとしての命脈を保っている。

表紙写真は、こうしたアフリカン・プリントのひとつである。これは一八四六年創業のオランダの「リスコ社」で、ローラーを使って布の画面にロウ置きをして染められたロウケツ染めのプリント更紗で、布の全面にあらわされた模様は、いずれもジャワ更紗の模様をデザイン・ソースとしている。

中学校から毎年八〇〇〇人の子どもたちがやって来る「鑑賞教室」という事業がある。彼らとおつきあいしてもらう「鑑賞リーダー」というボランティアを導入して、来年で一〇〇年になる。十数人から始まり、今では数百人にのぼる当館のボランティアには、「今日たまたまヒマになった」、「うちの近所の学校が来るから」と、至つてマイペースに活動する地元の方が多い。子どもたちがそういう近所の人たちと館内を回る。四六時中アートの話をしているわけでもなく、外に出で落ち葉やどんぐりを拾つたりすることもある。そうした「ゆるい」光景が何となくサマになってきた。昨今、この館もほんの少し「広場」に近づいてきたかな、と肌を感じる。数年前まではそうではなかった。そう、頭ではなく、皮膚レベルで納得できるほど確かに場が変わるのは、時間がかかるのだ。「広場」の寛容性・懐の深さは、たくさん的人が、気楽に、気長に育てて、ようやく息づいてくるものなのだろう。

こんなふうにたくさんの子どもや大人が自然体で歩き回れるように美術館が育つのは素敵のことだ。同時に、個人的にも、またエデュケーションに携わる立場からも、「墓場」としてのミュージアムに、わたしは抗いがたい魅力を覚える。

家出したクローティアが選んで眠ったのは、某伯爵夫人が殺害されたという、いわくつきのベッドだった。人とミュージアムのひとつの関係を示す、これは見事な比喩だと思つ。ミュージアムには、誰にも解き明かせない、巨大な秘密一死がある。わたしたちは、とりわけクローティアのように自分の「ねうち」を探しあぐねている思



ワークショップ 「誰もいない美術館で」

二年前から、わたしは中学生・高校生をおもな対象に「誰もいない美術館で」というワークショップ・シリーズを始めた。閉館後、文字どおり誰もいなくなつた美術館で、展示されているモノたちから受けたインパクトを、演劇やダンスというパフォーマンスによつて表現する、というのだ。「大丈夫、何でもありだよ」と、演出家の柏木陽さん(NPO法人演劇百貨店代表)をはじめ、毎回さまざまなゲスト・アーティストに見守られ励まされながら、中高生たちは週末の二日間、物言わぬ作品に向かひ、ああでもないこうでもないと逡巡する。そんな彼らが、静まり返つた展示室で、まるで作品と一緒になつたように演じ、踊り始めるとき、(起きると妖しい精彩を帶びてくるのだ。その瞬間に立ち会つたび、わたしの全身にはザワツと鳥肌が立つ)。

常連で参加し続けている、ある中学生によれば、このワークショップは「美術館の怪談」なのだという。また「変人たちの居場所」なのだから。大人以上に忙しい中高生を集めるために、苦労はするが、ミュージアムと自分の秘密にふれる居

生産されているが、イギリス、オランダ、中国、

春期の子どもたちは、家出=日常を脱出してその大きな秘密に近づくことで、自らを確かめようとする。そしてそれは、「墓場」—モノたちの静寂と沈黙が支配するミュージアムでなら、たぶん不可能ではないことなのだ。